

一仏両祖の教えを今に伝える

# 曹洞禅 グラフ

SŌTŌZEN  
Graph



特集

暮らしに息づく禅の教えと、

お盆の迎え方

受け継ぐ祈り、

心に灯る先祖の影

# 暮らししに息づく 禅の教えと、お盆の迎え方

## 受け継ぐ祈り、 心に灯る先祖の影

効率化がささやかれる現代、手間のかかる供養は不要なのか。  
長秀院に息づく祈りの姿から、亡き人と対話する真の豊かさを問う。

### 時代がどれほど変われど 決して失われない心の形

福島市の長秀院。緑豊かな地に昔ながらの厳かな風景が広がる。渡邊祥文住職は地域に息づく先祖供養の姿を「お盆に青竹を切り、花を束ね、ご縁のあるお墓を回り、手を合わせる。慰霊と『どうぞまたよろしく』というご挨拶。その姿こそ美しいと思うんです」と話す。

今も2、3日かけ40軒から50軒近いお墓を巡る檀家が多い。しかし現代は時間への満足度「タイムパフォーマンス（以下、タイム）」や費用対効果「コストパフォーマンス（以下、コスパ）」がもてはやされ、手間のかかる行事は切り捨てられがちだ。

自らの手で丁寧にお参りを行うことは容易ではない。「なかには体力的にも時間的にも厳しいと言ってお参り自体、やらなく

なっている方たちもいます。しかし、多くの方たちが今でもお参りをなさっている姿があります。どんなことがあっても欠かさない、そのお心が一番大事なところじゃないかなってその姿を見て常々思うのです」と語る住職。その言葉からは、効率を度外視してでも伝統を守ろうとする、見返りを求めない純粋な祈りの心が宿っていることこそ、尊いものだということだろう。

その根底にあるのは、長年培われてきた地域や人と人との深い結びつきだ。「15年前の大震災・原発事故で放射性物質が降っていると言われている時です。体への悪影響が懸念される事態ですから、当山の役員さんや篤信の方々を止めました。ところが、『われわれ高齢者は大丈夫だ。仏様の周りが汚いのはだめだ』からと、草刈りや応急処置を全部やってくださったんです。その姿があまりにも尊くて、思わず涙がこぼれま

仏壇の蝋燭に火をつけ、線香を灯し、ご先祖への供養をする心がけは大切。▶

# お盆に先祖が帰ってくるから 一緒に踊るんです。



▲長秀院の盆踊り

した。そして、そのような行動を身近で体験できたのは、歴代の住職と檀信徒の方々との、400年に及ぶ本当に真面目なお付き合いの賜物のおかげだと、改めて敬意を持って感謝したのです」と住職は話す。

コロナ禍や効率化で地域コミュニティの分断は加速し行事は姿を消しつつある。だが長秀院の盆踊りと関わりの深い蓬莱団地では数年ぶりに盆踊りが復活し、2000人規模の老若男女が会場を埋め尽くした。若者が供養の本意を理解していなくとも、発起した先人の根底には間違いなく先祖を供養する思いがあった。

「盆踊りというのは、先祖を囲んで踊るものです。今は親睦を主とした部分もあるけれど、お盆に先祖が帰ってくるから一緒に踊るんだと、古くから支える方々はよく分かっているんです。50年続くお寺の盆踊り

することが大事なんだと思うんです」。

その信念は、享和2年（1802年）より225回途切れたことのない大般若祈祷会にも表れている。「戦争中の住職不在時でさえ他寺のご住職にご導師をお願いし、守り抜いてきた姿に信仰の本質を教えられるのです。変えてはならぬものがある。ならぬものはならぬ。やめてはならぬものもあるのだよと」。

ならぬものはならぬという理屈を超えて規範を示すこの言葉には、困難でも信念を曲げない気質が表れる。「必ずやるんだ」という決意で保たれた姿勢そのものが、家庭教育であり社会教育となっているのだ。

## ● 墓前で静かに手を合わせ 亡き人との対話を始める ●

自ら足を運び、お墓の前で手を合わせる真の意義を住職は語る。「お墓に行つて皆拝んでいますが、あれは対話しているんですよ。故人と、先祖と、皆対話しているんです。心の中で迷っていること、苦しいこと、悲しいことを全部そこで出して対話をして

も皆さんが熱気を持って集まり、世代を超えた人たちが楽しんでる姿に、私も嬉しいのです」。自ら行動で示し共に楽しむ場を作る。それが伝統継承の第一歩となり供養の大切さを理解する糸口となる。背中を通じて祈りの心を伝えていくのだ。

長秀院には檀信徒の思いを形にして建立した茅葺屋根の東屋がある。「先代住職（父親）はよく『思っているだけでは伝わらない。思いを持ちながら形にすることが大切なんだ』と言っていました。供養というものも、そういう意味で思いを持つと同時に、形に



◀丹治庄衛(たんじしょうえ)

前総代長・護持会長。農林水産省勤務のかたわら、32歳から総代をつとめ、寺院外護に尽力している。

踏んでひとつずつやると、いろんなところで大事なところがあるんです。葬儀をすること、その人がどういう人たちとの関係性を持っていたのか、家族とともにいたとき以外の場所では、どんなことを一生懸命やっていたのか、実はこういう思いもあったんだなど、式の後に分かることがある。これこそ新しい対話なんです、葬儀の手順を端折ってしまうと、大切なことが見えなくなってしまう」と住職は警鐘を鳴らす。葬儀は生前の知られざる顔を共有する場だ。気づきを得ることで失われた命は心の中で生き続ける。儀式を省くことは豊かな再会をも奪うのだ。私たちは、目に見える効率



◀丹治正弘(たんじまさひろ) 昭和27年生まれ。

令和6年より護持会長。工務店に勤務時「優秀施工者」第1号として福島県知事より顕彰をうける。

ばかりを追い求め、目に見えない「心の豊かさ」を取りこぼしてはいないか。「もしかしたら、現実的、物理的なことほどうでもいいのかもしれない。今は亡き母親の遺影を見ながら語りかけている自分がある。そこが1番大きいこと。そういう生き方の方が豊かだと思えます。今は効率化という言葉で、枝を剪定しすぎた樹木みたいになってしまった。そこが今の私たち、つまり寺も檀信徒も含めた現代人の悩みでもあるんです」。

この時代にどう祈りの文化を受け継ぐか。「とにかく一緒にやる。50年後に思い出して改めて噛みしめるんです。そしてこれはと



▶長秀院住職・渡邊祥文(わたなべしょうぶん)。昭和31年11月17日生まれ。

布教教化を自らのライフワークとして歩んでおり、長秀院住職の他、教誨師、保護司も務める。元特派布教師、元布教師養成所主任講師、元人権擁護相談員。

いる。見えないけれど、ただお願いしているだけじゃない。対話を通して自分自身とも向き合っているんです。そこが1番大事などころじゃないかな」。生前言えなかった感謝も、お墓の前だから素直に言葉にできる。亡き人との対話は自分を見つめ直す時間なのだ。「お仏壇、お墓、そして子孫がいなくなっても供養してもらえらる位牌堂。この3つを揃えればいつまでも大事にしてもらえるという教育があったんです。それをこれからも繋いでいかなきゃならない」と。

伝統の形を守ることは亡き人と向き合う

ための準備だ。住職は「いなくなったからこそ、親の深い思いに気づき、生前よりも心が通じ合うということが1番大事かなと思っています。そのためにはやはり、ある程度儀礼を踏んで、きちっと形を作ってあげないとだめなところがあるんです」と語る。

しかし今、葬儀でさえ火葬だけで済ませようとする「簡略化」が進んでいる。タイプやコスパを求め、面倒なことを切り捨てた結果、私たちは本当に豊かになったと言えるのだろうか。

「火葬だけでいいよ、と言うけれど、手順を



◀長秀院の山門へと続く石段。境内は豊かな自然に囲まれ、参詣者を優しく出迎える。

もうひとりの檀家である丹治正弘氏もまた、お盆には35ヶ所ものお墓を巡る。さらに同氏は、かつて穴を掘った土葬の時代を振り返る。「皆で穴を掘り、自分の手で納めたからこそ、お墓に対する思い入れが全く違うんです」。かつてのお墓は土饅頭どまんじゅうと呼ばれ、最初の3〜5年ほどは、埋葬後に埋めた土で大きく盛り上がっていた。お参りでは

## 心静かに亡き人と語り合う時間が心を潤す

長秀院を支える檀信徒の方々も、親子、孫へと祈りの文化を受け継いできた体現者たちだ。檀家の丹治庄衛氏は、お盆ともなれば50ヶ所ものお墓を巡る。青竹を切り、自家製の花を束ねて供える手間の掛かる作法を、家族と共に守り続けてきた。「子供達にやれと言っても無理だけれど、格好だけは継いでくれるだろう」と、共に汗を流し教える背中が、何よりの伝承なのだ。供養とは決して特別な非日常の行事で

### 亡き人と語り合う時間が 日常に溶け込む祈りの形

も大事なことなんだよと言いつける。それが教育になる。人は何千年も前から苦しい時には手を合わせてきた。それを忘れないように伝えるのが我々の役目です」。効率で割り切れないものの中にこそ、亡き人を思い、手を合わせるという、人を人たらしめる尊い営みが隠されている。亡き人と語り合う時間は心を潤す。先人の「祈りの形」と供養の必要性を、私たちは改めて見つめ直す岐路に立たされている。

はない。庄衛氏は、自宅の仏壇の前に立つ時、亡き父親の遺影へ毎朝、おはようと声をかけるといふ。「昨日の出来事や、今日これからあることを報告します。生前は面と向かっては恥ずかしくて、そんなに話もしなかつたんですけれどね。いなくなつてからの方が、仏壇に向かって相談したり、あれこれと話しかけたりするようになりました」。

「来たよ」と声をかけ、上から棒でドンドンと地面を突いて亡き人と対話していた。叩いた時の応答がなくなると「土中の棺が潰れて土に還つたんだな」と実感したという。また丹治庄衛氏は「毎日、共同墓地の前を通るんです。朝夕にそこで眠る誰かの顔を思い出して、『今日も無事に見守ってくださいね』と自然に手を合わせる」と、日常の中にある祈りの大切さを語る。

そばにいる時はありがたさに気づけなくても、亡くなって初めて深く向き合うことができる。生前は言えなかつた感謝や日々の報告も、仏壇や墓前で亡き人との「対話」を通してなら素直に言葉にできるのだ。心静かに語りかけるその時間は、慌ただしい現代社会で自分自身を見つめ直し、明日を生きるための拠り所となっている



▶先祖供養に訪れる人々を穏やかな表情で見守る長秀院の六地藏

# 精霊棚で祖先様を迎える

現代の慌ただしい日々において、お盆休みは単なる夏の大型連休として消費されがちである。帰省や旅行のニュースばかりが目立ち、本来の意義が薄れているのかもしれない。今一度立ち止まり、私たちが先祖さまと深く語り合うための貴重な時間である、お盆のしきたりを改めて考えたい。

お盆の時期は、一般的には8月に行うことが多いが、関東地方の都市部など一部では新暦の7月に行われることもある。いづれにせよ、ご先祖さまの御霊が子孫の元へ帰ってくるという、古来の信仰は変わらない。大切なお客さまをお迎えするように、真心を込めて精霊棚という特別な祭壇を設けるのである。机などに真菰まこもなどを敷き、その上に飾られる供物には、ご先祖さまへの思いが込められている。

例えばキュウリの馬とナスの牛は、御霊を家に迎えるための大切な乗り物であり、手厚くもてなしたいという深い愛情と感謝が表

れている。また鮮

やかな鬼灯は、霊を迷わず家に導くための温かな提灯に見立てられている。さらに、季節の野菜や果物、そして生前好きだった品々を惜しみなくお供

えする。これらはご先祖さまに喜んでいただき、深い感謝の気持ちを伝えるためのものなのである。そして、お盆の入りとされる13日の夕暮れ時などに迎え火を焚く。揺らめくその炎は御霊が帰る道を間違えないように、と願う切なる道しるべでもあるのだ。

家庭や地域によってしきたりは異なるが、真心を込めて丁寧ていねいに供養することこそ何よりも大切なことなのは、これからも変わらないのである。

## 精霊棚・置き方の一例



絵・有本恵

最低限揃えるものは、五供（仏教の教えに基づき、仏壇やお墓に供える5つの基本的な供え物。香・花・灯明・浄水・飲食のこと）。香りで身を清め、花で華やかに荘厳し、明かりで迷いを照らし、水で汚れを洗い、食事で供養する、というそれぞれに深い意味と感謝の気持ちが込められている。

### ①お位牌

真菰を敷いた棚の最奥中央に、お仏壇から出して安置する。複数ある場合は、古いご先祖さまを右側、新しい故人を左側に配置する。

### ②お霊膳・浄水

白米、味噌汁、煮物、酢の物、香の物を、お水やお茶とお供えする。

### ③ホオズキ

ご先祖様の道しるべ。行燈でも可。

### ④お灯明

仏壇で仏に捧げる明かり(火)のこと。

### ⑤素麺

細く長い麺が「ご縁や長寿が長く続きますように」という願いや、天の川に見立ててご先祖さまが迷わず帰ってこられるようにする、という意味がある。

### ⑥キュウリの馬、ナスの牛

ご先祖さまがあの世界とこの世を行き来するための乗り物。行きはキュウリの馬で少しでも早く、帰りはナスの牛でゆっくり帰ってほしい、という願いがこめられている。

### ⑦お線香、経本、おりん(読経用)

### ⑧お花

白・黄・紫などの菊、百合、リンドウ、カーネーション等を飾るのが一般的。トゲや毒のある花、香りが強すぎる花は避ける。

### ⑨水の子

ご先祖さまと一緒に訪れる、無縁仏や餓鬼(喉の渇きや飢えに苦しむ霊)へのお供え物。賽の目に切ったきゅうりやなす、洗米を混ぜて蓮の葉や器にのせる。

### ⑩水向け

ミソハギ(精霊花)の花を浸して、お供えする水の子へ毎日水を振りかける。

教えて！『修証義』  
しゅしょうぎ

どうひよう

# 道元禅師の道標

文◎やなぎさわまどか 撮影◎羽柴和也



生きることの意味を

見失いがちな時代に、仏教は

私たちの道標みちしるべとなってくれるのか。

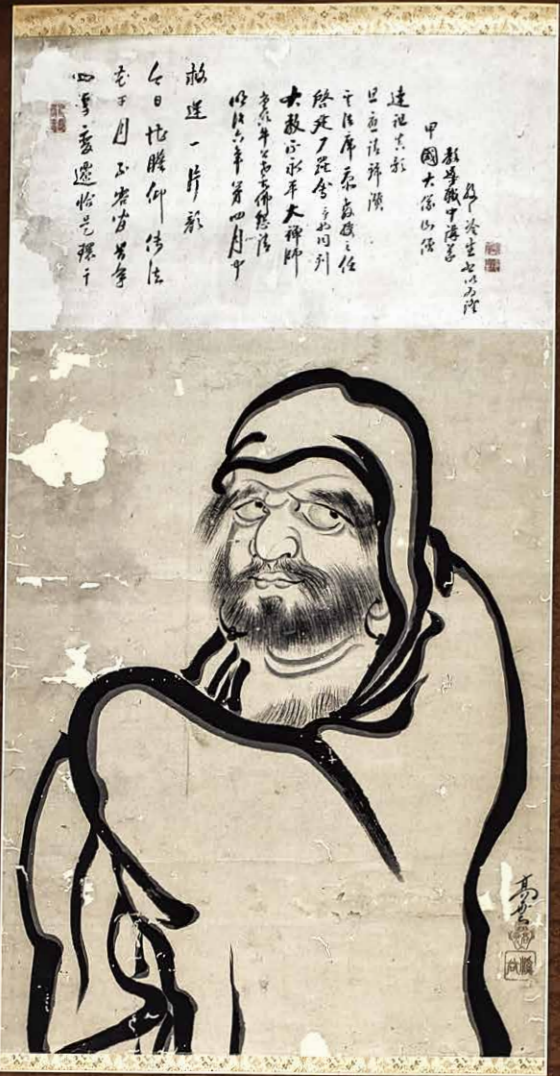
問いを抱えた筆者に、

『修証義』を手にした

枅野俊明老師が語りかける。

## 必ずつながっている 原因とその結果

中東でまた新たな戦火が広がってしまった。不穏なニュースと、頼りない政まつりごと。欲や執着、自我など、禅で説かれている価値観とは正反対の声ばかりが大きくなっていく世界で、自分の心を健やかに保つのも容易ではない。混乱を知らせる報道に触れる度、先行きが見えない不安が胸に広がっていく。「良いことも悪いことも、永遠に続かないのが無常。これは前回お伝えしましたね。



▲達磨禅師水墨画 / 高雲

猿狙百態で知られる高橋高雲によって描かれた水墨画。

禅師により中国へと禅宗が伝えられ、やがて曹洞宗や臨済宗などの禅宗五家に分かれた。



無常に移ろぐ世の出来事には、必ず原因と結果がある。第四節は、因果のお話です」と、修証義における第三節を振り返った枡野老師は、続いて第四節の概要を説いた。

「因果の因は、原因の因。良い因縁には良い原因が、悪い因縁には悪い原因が、必ずあると説いています。良くなるようにと努力したことが原因となり、チャンスが来る。良い時に、良い風が吹き、気運に乗れるんです」。良い時も悪い時も、原因が縁と結ばれて因縁が生まれるのだという。因縁とは、理不尽な言いがかりをつけることではなく、仏教用語だった。物事が生じる直接的な要

因と、間接的な条件である縁がつながり、結果に至る。禅の教えから見ても、私欲のために他国を攻撃する権力者の行いは、ただただ良くない未来を作り出す因だ。武器を置き、話し合いをして縁を紡ぎ、平和という結果を実現してほしい。

### チャンスは等しくやって来る 縁を逃さずに結ぶこと

「善因善果、悪因悪果と言うように、良い原因による良い結果、悪い原因による悪い結果があるのですが、結果がいつ出るのかは

今の世に因果を知らず、  
業報を明らめず、三世を知らず  
善悪を弁まえざる  
邪見の党侶には群すべからず、  
大凡因果の道理歴然として  
私なし、造悪の者は墮ち、  
修善の者は陞る、  
毫釐もたがわざるなり、若し  
因果亡て虚しからんが如きは、  
諸仏の出世あるべからず、  
祖師の西来あるべからず。

## 修証義第四節

分かりません。自分が元気なうちとは限らず、子どもや孫、あるいは曾孫の時代かもしれません。いつか必ず結果となって現れます。何か素晴らしいチャンスに恵まれた人に、『ご先祖様の行いが良かったんだね』と言うのがまさにこれです。第四節の初めでは、だからこそ善悪の分別ができなくてはならない、と説いています。しかし、何の努力もせずにいると、たとえ良い風が吹いてもそれがチャンスであることに気づくことができませぬ。例えば、春が来たらすぐ咲こうと準備していた梅の木と、春風が吹いてから準備しようとしていた梅の木があったとします。まだ少し肌寒い春の季節、たった1日だけ暖かくなったその日にうまく咲けるか否か。それまでの意識と準備で結果は大きく変わってしまいますよね。縁というチャンスはみんなに平等に來ます。しかしそれを因縁に結べるのは原因を作っていた人、良い努力をしていた人だけです。何事にも必要なのは、成し遂げたいという情熱や、弛まぬ日頃の下準備ということだ。努力をしなければ、世界平和だって実

現しない。2026年2月末以降、首相官邸前をはじめとする日本全国で「平和憲法を守るための緊急アクション」が連日開催されている。数万人に及ぶ参加者たちは会社員や主婦、学生など、ごく普通の生活者たちだ。憲法改正を積極的に進め、殺傷能力のある武器を輸出しようとするなど、日本に悪果を招かんばかりの為政者たちに声を上げるため、自主的に集まり、縁を繋いでいる。つまりこのデモは「国民が望む未来」という結果にむけた因縁づくりの努力だ。

### 明日への善因を築く行い 3つの業が基礎となる

たとえ戦争中でも、個々人の生活は淡々と続く。憂いに負けず、私たちが健全な精神を保つにはどうしたらいいのだろう。

「良い行いを重ねることです。仏教では行いのことを業、または業報と言います。清らかで良い心持ちでいることが大事ですが、心は形のないものですので、実践を通じて形あるものに変えてみる。3つの業を順番

「もし因果の理が存在しないとしたら、わざわざインドから達磨大師が仏教を伝えにやって来るわけがない。第四節の最後でそう言っています。因果を考えて生活するか、そんなこと考えずに生きるのか、人生に

に整えていきましょう」。

枅野老師が教えてくれたのは、三業と言われる考え方だった。ひとつ目は立ち居振る舞い、身なり、礼儀作法など、身体性を伴うことを意味する身業。2つ目は、言葉遣いなど言語表現を示す口業。身業が整うことで、自然に言葉遣いも良くなるらしい。この2つが揃うと、今度は心や意思が整っていく。3つ目は、意業と呼ばれている。業を考えず、因果の道理を知らないような、分別がない人たちと群れてはいけない。そう言いきる第四節は、死生観や無常など、人間社会の仕組みを説いていた三節までの内容に比べて、修証義が禅の教典だと再認識させた。

大きな違いが出てくると伝えているんです。こうした教えに納得して暮らすことを、信心と言いますね。先人たちが教えてくれる人生経験を、『そうか、そういうものなのか』と納得し、自分の人生にも取り入れることが信仰のはじまりです」。

庭園デザイナーでもある枅野老師は、禅の精神を庭という形に落とし込むという。僧侶として会得した境地を空間デザインに置き換えることで、庭を見る人が禅的な生き方を汲み取れるように、と考えられている。自然物が伝える無常説法こそ、人間の愚かさを凌駕するのかもしれない。不条理な紛争で揺れる時も、戦禍にいる人々のことを忘れずに、しかし今日の自分の業を整えること。それが縁となつて、未来には小さくも確実な善果になる、と信じた。 ㊦



▲庭園デザイナーでもある住職の手がけた寺院内の枯山水。



枅野俊明(ますの・しゅんみょう)  
曹洞宗徳雄山建功寺住職、庭園デザイナー、多摩美術大学名誉教授。著書に『あらゆる悩みが消えていく、涼と生きるための禅メンタル』(飛鳥新社)他多数。

# 坐禅してもなんにもならぬ

文◎柳田由紀子(在米ライター)

## 10

年ほど前のことだ。乙川弘文(故人)という曹洞宗のお坊さんの坐禅に関する法話集を読んでいたら、無性に坐禅を試みたくなった。そこにはこう書いてあった。

「小さな自分の存在を忘れた瞬間、  
全宇宙が現れるのです」※

私は長いこと、坐禅とは自己に集中する孤独な行為だとばかり思っていた。ところが右の文章に出逢った時、もしかしたら反対に、世界や宇宙と一体化する外向きの行いなのかもと感じたのだ。自分の命は自然や祖先から「たまたま」授かったものなのに、私はいつも「私が、私が」と我執でがんじがらめになって生きている。

それで思い切って坐禅会に参加すると、やっぱりきつかった。人は普段、自分で考え、判断し、行動する。坐禅の最中もこの習性は変わらないから、考え(雑念)が巡り、考えに

こうして浮かんでは流し、流しては浮かぶ考えに何とか折り合いをつけて坐禅を続けていた頃、しかし私は、身も蓋もない言葉に遭遇してしまうのである。

「坐禅してもなんにもならぬ」

えっ？

発言者は曹洞宗の巨人、澤木興道。師の真意はこういうことらしい——悟るために坐禅すると言う者がいるが、それでは目的を握りしめているのでダメだ。そうではなく、なんにもならぬ坐禅をしてべったりこんの人間モードを御破算にせよ。

正直、10年の間には何にもならないことをしていいの？ と首を捻ったこともある。けれども、ある年を境に迷いは消えた。当時、私は人間関係のドツボにはまり、考えて、考え抜い



したがって身体を動かしたくなるのだ。 Rodgers の彫刻、『考える人』は背中を丸めているけれど、『考える人』とは真逆の姿勢を保つ坐禅は、考えていたのではできないのである。

私がしているのは曹洞宗の坐禅だ。旨とするのは「只管打坐」といってただただ坐ることを。これに較べたら、心のなかでマントラを唱えたり、特定の呼吸法に集中したり、難題に取り組んだりする他派の坐禅や瞑想は少しは楽ではと思ったりする。頭を使う余地があるからだ。

ただし、ただただ坐る曹洞禅もさすがに「考えを止める」とまでは言っていない。第一、普通の人間にそんなことはできやしない。代わりに、「考えにエサをやるな、そのまま放っておけ」と教えられた。イメージは大河だという。大河は遠くから眺めると止まっているように見えるが、その実、静かに閑々と流れている。

で、疲れ果てていた。そんな時、坐禅してハッと気づいたのだ。

「そうだ、今は考えなくていいんだ」

これはありがたかった。考えもせず、行動も起こさず、ただ坐っていても、自分を責めなくていい坐禅とはなんと特別で贅沢な時空間だろう。

以来、私は坐禅中に思いが浮かぶと「もつたいたい、もつたいたい」とつぶやきながら坐っている。そして時折、自分が坐っているのではなく、自分を包む空気や光、音などの周囲の力によって坐らされていると感じることがある。

坐禅する、なんにもならぬことをする、それでお願いします！

只管打坐、これほど世にも潔い教えは他にない。



やなぎだ ゆきこ  
1963年東京生まれ。早稲田大学第一文学部卒業後、新潮社入社。2001年渡米。著書に『宿無し弘文—ステイフ・ジョブズの禅僧』(集英社文庫/第69回日本エッセイスト・クラブ賞)、翻訳書に『セン・オブ・ステイフ・ジョブズ』(集英社インターナショナル)ほか。在日サンゼルス。

※ "EMBRACING MIND" (Jikoji Zen Center)



# 子どもものの心の痛み

子どもの頃に深い心の痛みを被ることは少なくない。はなはだしい心の痛みが生じるであろう虐待の報道が増えている。子ども頃に受けた虐待のトラウマで、大人になっても苦しんでいるという人たちの語りを聞く機会も多くなった。家庭が安らぎの場であることができず、家で苦しみ、家を出ることのでかろうじて落ち着いて暮らせるようになるといったケースも増えている。

社会的に共有される話題となつてから数十年を経過する。対策はとられているが、目覚ましい成果をあげたという話は聞かない。学校が耐え難いストレスの場となっている子どもも少なくない。日本の自殺者の数は1998年以降、3万人を超えていたが、2012年に3万人を下回り、2025年には2万人を下回ったという。ところが、若年層の自殺者は高どまり傾向で、10歳代の自殺は今も多い。

私はこの3年ほど少年院で読書会をし、解きほぐすことが容易でない心の痛みをもった少年と語り合う機会を持つてきた。宮沢賢治や新美南吉、トルストイやアンデルセンなどの物語を読み、それを素材に3、4人の少年たちと話し合うものだ。

15歳から20歳ぐらいまでの青少年だが、学校に行けなくなったり、学校に行っても授業にほとんどついていけなくなった子が多い。実の父親とはもはやつながりがなく、親子の関係が良好でなく、家に帰りたくないという子も多い。家にも学校にも居場所がなく、悪事を働く仲間に入るしかなかったという話には、やむをえなかったのだなと思うとともに胸が痛む。

定時制や通信制の高校に通つても退学していたりするが、部活は好きだったという話もよく聞く。もちろん楽しい思い出もあり、家族との間で温かい時を過ごした記憶も聞くことがある。また、家庭ではケアされる側というよりは、年下の子をケアする側に置かれている子が多いように思う。ある程度、料理はでき、家事もこなしている少

年も多い。

そういう話を聞くと、家庭環境にも恵まれ、学校にも順調に適応してきた子どもとは異なるある種の経験を積んできていることに気づく。そうした経験を人間形成に役立てる可能性も十分、あるはずだ。だが、10代後半で、人生でできることの可能性がかなり狭められてしまっているように感じ、残念な思いがすることが多い。

現代社会で生きていく上で身につけるべき道義心や思いやりの心を、子どもたちはどうのように養つていくのか。それを考えるためにも、現代の子どもたちが被っている心の痛みや悲しみについて、大人はもっと関心をもつ必要がある。個々の家族と専門家に任せるということでは足りない。それは、私たちの社会の良き未来を考えることも切り離せないことだ。



島 進(しまのすすむ)  
1948年生まれ。宗教学者。  
東京大学名誉教授。  
上智大学神学部特任教授。  
同クアリーケア研究所所長。  
専門は日本宗教史。

絵・本間希代子 | 絵描き。岐阜の山村で田舎暮らしをしながら、古楽器奏者の夫・渡辺敏晴とアトリエ玉手箱を主宰。

具一切功德  
慈眼視衆生  
福聚海無量  
是故応頂礼

具 一 切 功 徳  
慈 眼 視 衆 生  
福 聚 海 無 量  
是 故 応 頂 礼

妙法蓮華経観世音菩薩普門品第二十五

（観音さまは）お救いくださる

恵みの全てを具えていて

慈悲の眼をもって衆生をご覧になり

あらゆる福は果てしない  
海のようにです。

是の故にその足下に  
拝礼しなくてはならないのです。

訳・丸山劫外

作品募集

ご家族のみなさまのご応募をお待ちしております

お手本を参考にして、作品を半紙（横向、お名前は左側）に書いてご応募ください（無料）。

ご応募の中から優秀な作品を選び、年に1度誌上で発表し、記念品を贈呈します。

住所、氏名、電話番号を明記して作品をどしどしお寄せください。

177号（今号）～180号（春号）の審査発表は183号（冬号）にて行います。

宛先 〒252-0116 神奈川県相模原市緑区城山4-2-5 仏教企画『曹洞禅グラフ』毎日書道募集係宛  
締切 2026年9月末日（当日消印有効）

曹洞禅グラフ  
募集俳句選

選 尾崎竹詩

明り窓土間に影置く冬の月

作者不明

ハガキにて投句されて来ましたが、肝心の作者名が書かれていませんでした。消印は「草津」でしたので群馬県の方かと思われ  
ます。この句は写生に徹したところがすばらしいところです  
と堪えてそれを読者に任せているのです。古民家らしき土間に  
冬の月光が四角く射している。その静寂と冷え冷えとした空  
気が広がります。

初写経沸き立つ薬缶の音の中

三重県◎岩倉佳子

この句も写生に徹した格調のある句になっています。身の  
引き締まるその年の初めての写経に臨む作者が薬缶の音の  
み聞こえるというのです。薬缶の沸き立つ音と言っても決  
して大きな音ではないはず。しかし精神を統一して写  
経に臨んでいるとその音が心地よいバックミュージックと  
なって聞こえて来たのです。

厚き霜わが家の影だけ消え残る

広島県◎小畑宜之

この句は発見と感動があります。作者の家のとなりにある  
畑でしょうか。早朝は一面真っ白に霜を置いていたのです  
が太陽が昇ってくると我が家の影にあたる部分だけ霜が解  
けずに残っているというのです。発見や感動が俳句の基本  
です。

作品募集

みなさまのご応募をお待ちしております  
（おひとり3作品まで）

お申し込み方法

作品、住所、氏名、電話番号を明記して下記の  
いずれかにてお寄せください。

- ① はがき、封書で投稿  
〒252-0116 相模原市緑区城山4-2-5  
仏教企画『曹洞禅グラフ』俳句募集係宛
- ② Eメールで投稿  
fujiki@water.ocn.ne.jp

締切

2026年9月末日（当日消印有効）

- ご応募の中から優秀な作品を選び、誌上にて発表  
する予定です。
- 更に年に1回冬号（新年号）にて年間優秀作品を  
選出し、記念品を贈呈します。

踏まれたる枯芝にある底力

静岡県◎亀澤淑子

なんでもない所に感動を覚えたのです。枯芝の上を歩いた  
ら枯れていると思つた枯芝に命の息吹き感じたのです。鋭  
い感性です。今回は掲句4句の外にも優れた俳句がたくさ  
んあり選句にうれしい悲鳴でした。

選者詠

葭切や大河は決して急がない

尾崎竹詩

特集	暮らしに息づく禅の教えと、お盆の迎え方 受け継ぐ祈り、心に灯る先祖の影 ----- 01 山河宗太
	精霊棚でご先祖を迎える ----- 09
連載	教えて!『修証義』道元禅師の道標 ----- 11 やなぎさわまどか
連載	私と曹洞宗との出会い 坐禅してもなんにもならぬ ----- 17 柳田由紀子
	子どもの心の痛み ----- 19 島藺進
	毎日書道・作品審査評 ----- 21 松山妍流
	募集俳句選 ----- 22 尾崎竹詩

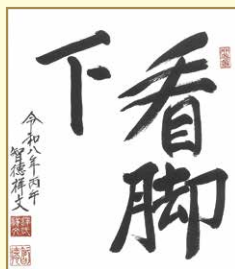
### 表紙画「三尺三寸箸 - 地獄と極楽の食事」 平川恒太

今回は、仏教の「地獄と極楽」の説話に登場する、三尺三寸箸をテーマに描いています。

地獄では長い箸で自分の分を奪い合い誰も食べられませんが、極楽では同じ箸を使って互いに食べさせ合うため、皆が笑顔で食事を楽しめるという相手を思いやる心の大切さを説いた物語です。現代の世界では、資源や土地などを奪い戦争や争いが起こっていますが、仏教が伝える平和や幸せのあり方を改めて考えたいものです。

### 夏号・読者プレゼント

読者  
プレゼント  
5名様



色紙の文言「看脚下(かんきゃっか)」とは、「足をよく見よ」という禅の教えです。中国の禅僧・法演が、夜道で風により明かりが消えた際、「どう進むべきか」と弟子に問いかけたところ、「看脚下」と答えたことに由来します。暗闇では余計なことに惑わされず、自らの足元を見つめることが大切——そこから転じて、自分自身の生き方を省みる教えとして伝えられています。今回は、福島県・長秀院住職、渡邊祥文師直筆の色紙を5名様にプレゼントいたします。

### 175号・冬号(『村松哲文監修/超図解 仏教大辞典』)読者プレゼント当選者

▶戸嶋昇様 ▶宮澤裕子様 ▶松永博子様  
▶小島幸子様 ▶原島照夫様

郵便番号、住所、氏名、電話番号、今号の感想をお書き添えの上、はがきにてご応募ください。Eメール、FAXでも受け付けております。また身近な人との心温まるふれあいや仏教についての質問などもお寄せください(2026年9月末日消印有効)。

〒252-0116 相模原市緑区城山4-2-5  
仏教企画『曹洞禅グラフ』プレゼント係 宛  
Eメールアドレス fujiki@water.ocn.ne.jp  
FAX 042-782-5117

### 読者からのお便り

- 60才の時ケガで骨折し、障害を持ち暮らしていましたが、柘野老師様の『なにごととも無常「今のありがたい」に気づく』を読み、人生山あり谷ありという事に改めて気付かされました。